

有珠モシリ遺跡出土の聖山式及び幣舞式折衷土器の分析

Analysis of Compromise-style Pottery of the Seizan and Nusamai Types Excavated from the Usu Mosiri Site.

堀籠光太郎 HORIGOME Kotaro

論旨

本論では、有珠モシリ遺跡出土の聖山式及び幣舞式の折衷土器を中心に据え、縄文時代晩期末の北海道における土器文化圏の変動と、土器移動の背景にある人の移動を検討した。また、併行期の道南部における幣舞式出土例を集成することにより、類例が噴火湾沿岸部に集中することを明らかにした。

加えて、レプリカ法、デジタルマイクロスコープによる沈線文の観察から、施文具の違いと製作者の帰属する集団を峻別するとともに、施文具と施文手法の解明が人の移動にも直結することを指摘した。

キーワード：幣舞式土器 土器文化圏 折衷土器 施文手法

1. 本論の目的と意義

縄文時代晩期後葉の北海道は、石狩低地帯付近を境界帯として東西に異なる土器文化圏が並存していた。渡島半島から石狩低地帯付近にかけては、大洞式土器の北部様式である聖山式土器が広がり、道央部以東には在地性の強い幣舞式土器が成立する。両土器は器形や文様、製作技法等においても大きな違いがあるが、明確な差異として挙げられるのが施文具である。道南部においては東北地方の大洞式と共通した平滑な沈線が施され、道央部以東においては草木の莖を用いたと考えられる沈線が施される。これらの施文手法に着目した分析は熊谷仁志や豊原照司によって行われてきたが(熊谷1990, 豊原 1994)、対象は縄文時代中期のモコト式やシュブノツナイ式に限られ、縄文時代晩期の分析は行われていない。

一方で、北海道伊達市有珠モシリ遺跡では、聖山式期の貝層から、幣舞式の影響を受けたと考えられる土器が出土している(図-1,2)。本論の題材となるこの土器は、口縁部が聖山式、胴部下半が幣舞式の文様構成を有しており、施文手法も選択している可能性が高く、土器の移動や土器文化圏の変動を考察するうえで重要な資料である。

本論では、有珠モシリ遺跡出土の折衷土器を中心に据え、型式学的な検討を行いつつ、両土器の施文手法にも着目し検討を行っていくことにより、両土器文化の交流の様相を

検討していく。分析にあたり、主題として挙げる有珠モシリ遺跡出土の聖山式と幣舞式の折衷土器を「折衷土器」と呼称し、論を進めていく。

2. 北海道における縄文晩期土器の研究史

亀ヶ岡文化が北海道の南部に強い影響を与えつつ、道央部以東においても精製土器が搬入されることを具体的に述べたのは、山内清男による論考が初出である(山内 1933)。山内は、道南には亀ヶ岡式土器が分布し、道央、道東には主体的な在地性の強い土器と、客体的な精製の亀ヶ岡式土器が混在すると述べた。以降、北海道における晩期土器研究は「より粗製の土器」(野村 1985)、すなわち、亀ヶ岡式土器の影響が弱い、在地性の強い土器群における編年の確立が念頭に置かれることとなった。

その後、資料数の増加や吉崎昌一らによって北海道全域にわたる編年案が提示されたことにより、縄文晩期土器研究が飛躍的に進歩した(吉崎 1965, 野村 1985)。

1979年には東北大学によって七飯町聖山遺跡が調査され、一括出土した大洞C₂(新)式からA₁式併行の土器群が、津軽海峡域に分布する大洞式土器の北部様式として、それぞれ聖山I式・II式と設定された(芹沢編 1979)。

以上のように編年が構築されていくに従い、林謙作によって土器の系統ごとの分類が行われ、「大洞系」・「類大洞系」・

「非大洞系」の概念が提示され(林 1987)、この非大洞系土器群として扱われたのが幣舞式であるが、釧路市幣舞遺跡での聖山式精製壺の多数出土や、後続する緑ヶ岡式において施文方法が亀ヶ岡式土器と類似する事例が知られている(澤田 2018)。幣舞式土器編年の作成は、併行する亀ヶ岡式土器との対比を行う上で非常に重要であり、多くの研究者によって細分されているが(鷹野 1981, 金森 1989, 土肥 1996, 2025, 中田 1998, 鈴木 2002, 福田 2007他)、関根達人(関根 2012)によって編年の整理も行われている。

大沼忠春は、幣舞式土器の編年を作成し、幣舞式土器文化が道南部へ広がり、道南部の亀ヶ岡式土器と融合することにより、続縄文土器の土台となることを示している(大沼 2008)。一方で、近年行われた木古内町大平遺跡の発掘調査において、大洞A₂式及びA₁式併行の土器群が纏まって出土しており(土肥 2017)、道南部南端における資料の充実化も進んでいる。

3. 対象と研究方法

対象とするのは、大洞C₂(新)式 - A₁式併行期における北海道の土器群であり、聖山式、幣舞式を対象とする。

両土器の編年については、小林圭一、土肥研晶の編年案に従い(小林 2018, 土肥 2025)、聖山I式・幣舞式古段階を大洞C₂(新)式、聖山II式・幣舞式新段階を大洞A₁式併行として論を進める。

研究方法としては、第一に有珠モシリ遺跡出土の折衷土器の観察・事実記載および分析を行い、型式学的検討を行う。また、類例の集成と分析から、編年上の位置を明らかにする。

次に、有珠モシリ遺跡晩期貝層ブロックサンプル出土土

器の分析を行い、層位(人工層位)ごとの出土土器を明らかにする。加えて、併行期の北海道南部における幣舞式土器の集成を行い、当期における土器文化圏の様相を把握する。

最後に、デジタルマイクロスコープ及びレプリカ法(丑野・田川 1991)を用いて、沈線文内の線状痕や沈線文幅の詳細な計測を行い、製作者の帰属する集団を施文手法の観点から検討していく。分析には主にハイロックス社製HRX-01を使用した。

4. 折衷土器の分析

4-1. 折衷土器の詳細

本論が主題に挙げる土器であり、2023年調査において晩期貝層(聖山II式期)から出土した。器形は鉢であり、胴部下半は見つかっていないが、平底を呈すると考えられる。胎土は細かく、焼成は良好である。口縁部には二頭状の突起及び突出する把手を持ち、聖山式の様相を呈する。口縁部直下に隆線手法によって作出された平滑な多重沈線が三条巡り、聖山式に多用されるB突起がニカ所現存し、完形では6単位になると考えられる。

一方で、胴部には菱形をクランク状に表現した沈線による文様帯が施され、クランク内には雫形の文様を充填し、空白には三角形の沈線が施される。また、クランクに沿ってV字状に単節RLの縄線文が施される部分も確認できる。文様下端には器面を周回するであろう平行沈線があり、胴部文様帯を区画している。

文様構成は幣舞式古段階と類似し、類例は斜里町ボンシュマトカリベツ9遺跡(斜里町 1999)や釧路市緑ヶ岡遺跡¹⁾の渦巻沈線を施された舟形土器に求めることができ、主要な



図1 有珠モシリ遺跡晩期貝層出土の折衷土器

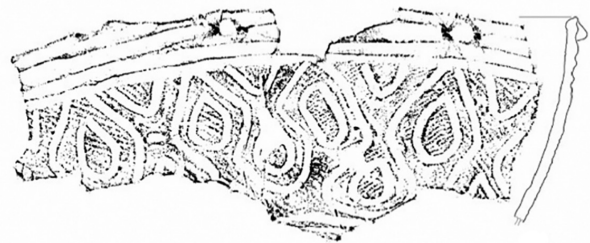


図2 折衷土器 拓本



図3 類例の集成

分布は根釧台地付近にあることがわかる。しかし、前者は一本の沈線を一筆書きの要領で文様を作出するのに対し、後者は渦巻き状に沈線を施しており、文様の作出技法に違いがある。文様の表現方法は異なるものの、クランクの空白に雫状の文様を充填することにより、類似した文様構成となっている。福田正宏はボンシュマトカリベツ9遺跡出土土器を幣舞式の古い段階に位置付けており(福田 2007)、聖山式との併行関係の把握が本論においては重要となる。したがって、有珠モシリ遺跡出土の折衷土器の出土状況を見ていこう。

折衷土器は2023年の有珠モシリ遺跡発掘調査において、2023年1号墓(以降1号墓と呼称)覆土及び隣接する晩期貝層ブロックサンプルAより出土した。1号墓、晩期貝層は人工層位を設定し掘削され、1号墓からは恵山3式、聖山Ⅰ・Ⅱ式が出土している(青野他 2024)。折衷土器は連繫入組文、横位連続工字文の付された四脚付鉢と共に出土している。四脚付鉢は大洞C₂式-A₁式期に東北地方で多く製作されることから、貝層は聖山Ⅰ式からⅡ式の移行期に位置し、墓坑はその貝層を続縄文期に掘削して築造していると考えられる。

一方で、晩期貝層からは純粋な聖山式期の貝層が検出されている。晩期貝層は7回に分けて発掘されており、折衷土

器は最下層からの出土である。7層からは連繫入組文の付された土器が出土しており、折衷土器は聖山Ⅰ式併行と考えられる。

その他にも、有珠モシリ遺跡では幣舞式土器の影響を受けた、又は完全に搬入品とみられる土器も出土している(図-6)。図-6:1はBS北17より出土した薄手の鉢で、括弧状沈線を施す(青野他 2024)。口縁部は竹管状工具で刻みを入れ、裏面には4条の縄線文列が並ぶ。類例は道央部におけるママ

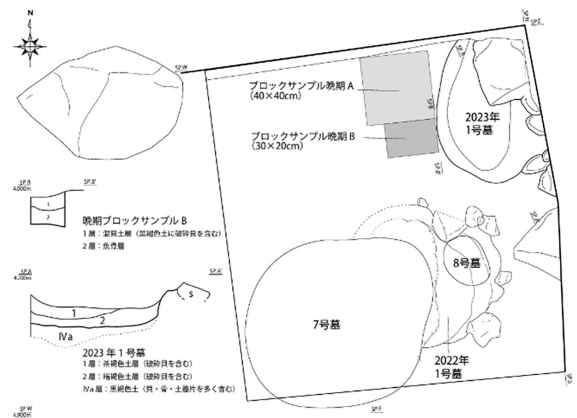


図4 有珠モシリ遺跡調査区(青野他 2024より引用)

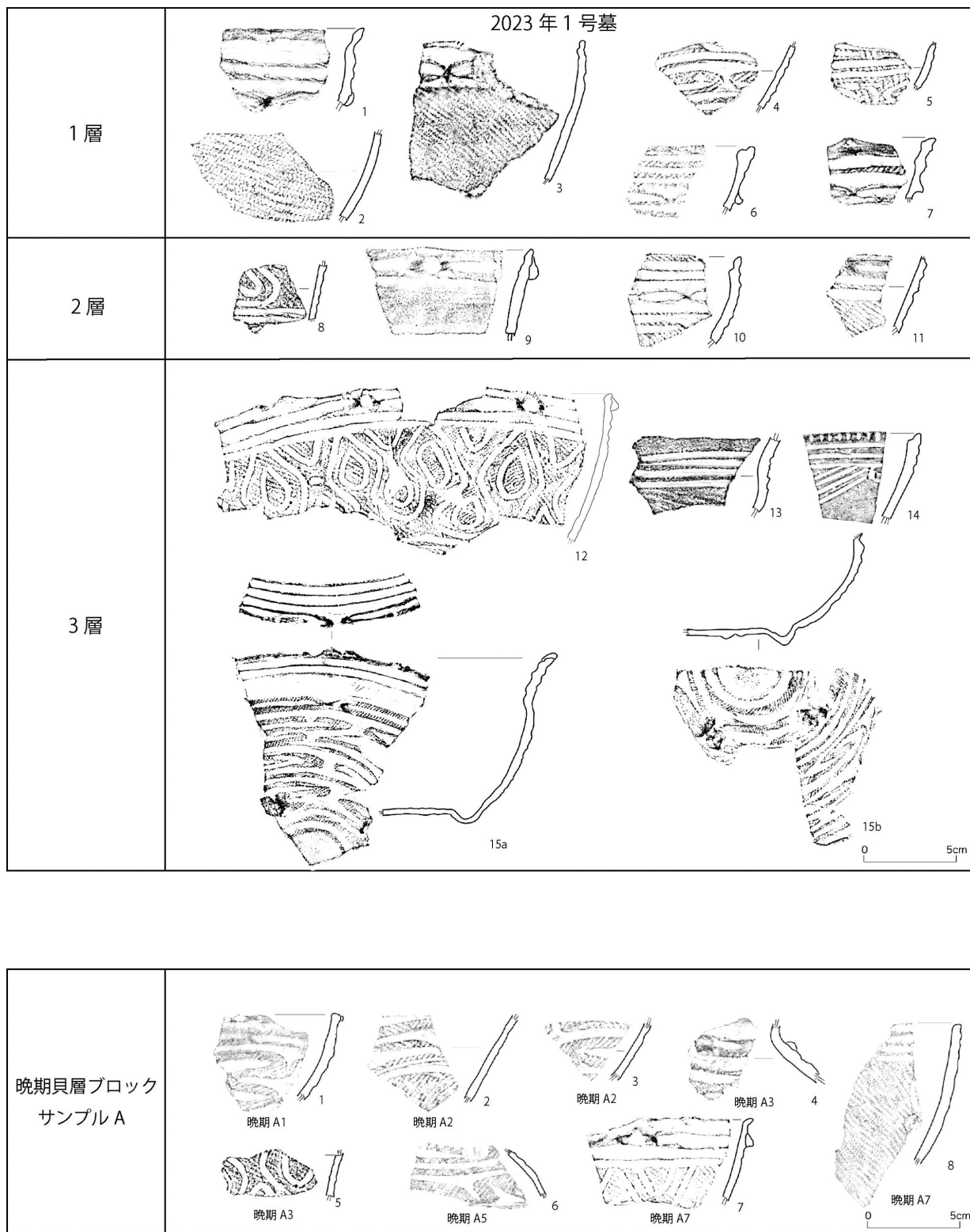


図5 2023年1号墓・晩期貝層ブロックサンプルの層位と出土土器

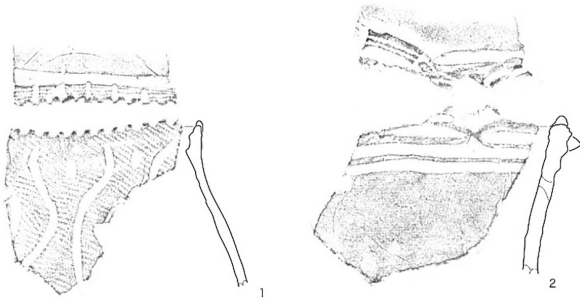


図6 有珠モシリ遺跡出土の幣舞式土器・折衷土器

チ遺跡(中田 1998)等に見られ、色味や焼成、文様構成等の製作技法が道央部と比べほぼ共通していることなどから、道央部以東からの搬入品として提示した。

図-6:2は調査区出土の壺であり、頸部から口縁部までが残存している(青野 2025)。聖山式期の一般的な壺の造形を呈するが、口縁部裏面の沈線をなぞるように縄線文を配置しており、沈線内部にも植物質工具による線状痕が残存する。

4-2. 道南部における幣舞式土器の出土例

続いて、道南部における幣舞式土器の出土例を抽出すると、道南部では、伊達市、洞爺湖町、森町、八雲町で幣舞式土器が出土している。一括出土の例としては伊達市稀府川遺跡(図-7:1-11)があり、舟形土器(1.5)や縄線文・刺突文を付した深鉢などが出土しており、主体を成す聖山式とは離れた位置で出土している。総じて見ると、幣舞式古段階の特徴を呈しており、特に、1.5は幣舞式から緑ヶ岡式期に盛行する舟形土器の祖型として提示されている。

その他では、森町鷺ノ木4遺跡や同町上台1遺跡においても出土している。12は口縁部上面に縄線文が押捺された厚手の鉢で、舟形に類似した器形を形成すると考えられる。13は工字文上に刺突が施され、口縁部上面に縄線文が押捺されていることに加え、沈線の断面形状が聖山式と比べて鋭利である。

15は洞爺湖町高砂貝塚遺構外出土の小破片であるが、内削ぎの口縁部と、縄文地に鋭い沈線が施される特徴から、報告の中ではタンネトウL式との関連を指摘している(大島編 1987)。しかし、出土した晚期土器の大半を大洞C₂式が占めることから、本論では幣舞式として提示している。

八雲町山越5遺跡では、幣舞式土器が土坑内から出土している。聖山式と類似する断面形状であるものの、口縁部上面に縄線文を付すために、口縁部を水平に整形している。17-

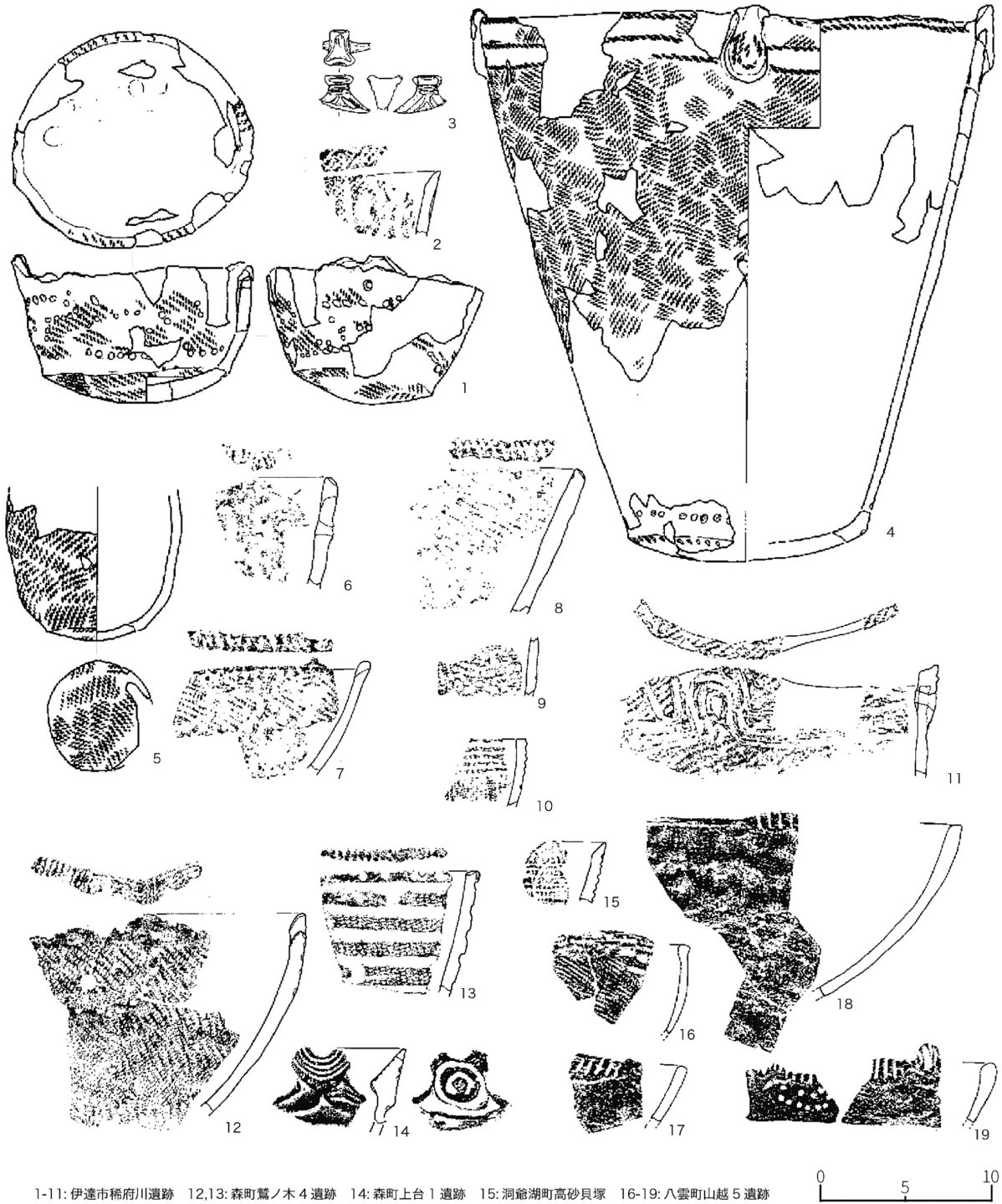
19は同一個体であり、口縁部に縄線文が付され、口縁部裏には中空状工具による刺突が並ぶ。

抽出した土器を総括すると、器形・原体・縄線文・刺突・文様構成などが幣舞式と共通するものがある。特に、縄線文と刺突は亀ヶ岡式土器の文様構成要素に該当せず、幣舞式土器の特徴として捉えることが出来る。

また、稀府川遺跡出土資料を除いて、ほとんどの遺跡では聖山式が主体を圧倒的に占める。多くは口縁部を水平、鋭利に内傾するように成形し縄線文を施したもの、刺突文を施したものが多い。八雲町や森町における幣舞式土器の在り方を踏まえると、道央部以東との交流のみならず、人の移動が日常的にあったことが想定される。一方で、稀府川遺跡から出土した大洞C₂式-A式併行期の土器は総数で5377点であり、その内の519点がタンネトウL式として分類されている(北埋文 1991)。4は幣舞式の典型的な器形であり、稀府川遺跡の土器組成は、土器文化圏が接する遺跡立地を考慮しても異質である。

大沼忠春は、山越5遺跡及び高砂貝塚出土の資料を踏まえ、「いったん亀ヶ岡式の文化となっていた地域では亀ヶ岡式土器の幣舞式化」が進行すると発言している(大沼 2008)²。この発言には明確な遺跡の例示はないものの、聖山Ⅱ式以降、全道規模で土器の在地化が進む現象の先駆的な例として、聖山式土器の文化圏に幣舞式土器の製作技法が伝わっていたことを示唆している。さらに、森町鷺ノ木4遺跡からは、幣舞式土器文化圏に関連する遺物として知られる粘板岩・珪質頁岩製の大型削器が出土している。このことから、大沼忠春が提唱した聖山式の幣舞式化現象は、土器のみならず他の遺物や文化の面においても影響していた可能性が高い。

以上より、縄線文や刺突、器形のみならず、縄線文・刺突を配置・施文する部位の情報が伝達されていることから、幣舞式土器文化圏における土器製作方法を知る製作者の関与が予想される。また、石本省三は聖山Ⅱ式→知内町湯の里5c群→森町尾白内Ⅰ群への変遷過程を提唱し、尾白内Ⅰ群に「類大洞系」の文様から影響を受けたと思われるものがあることを述べている(石本 1998)。図-7から分かる通り、聖山Ⅱ式期に道央部以東から土器文化が流入していることから、裏付けをとることが出来よう。



1-11: 伊達市稀府川遺跡 12,13: 森町鷺ノ木4遺跡 14: 森町上台1遺跡 15: 洞爺湖町高砂貝塚 16-19: 八雲町山越5遺跡

図7 道南部における幣舞式土器の集成

4-3. 顕微鏡による折衷土器の施文手法の検討

本土器の最も特異な点は、口縁部付近は聖山式の手法で製作されているのに対し、胴部文様は幣舞式の施文手法が

用いられている点である。胴部沈線内部には、植物繊維と思われる細かい線状の痕跡と半月状の抉りが残り、道央部以東の施文手法を用いていることが分かり、施文手法におい

ても幣舞式土器と相違ない。一般的に幣舞式土器の施文は平滑な施文を施す亀ヶ岡式に比べ(會田 1991)、植物質の施文痕跡を残す。幣舞式の沈線は棒状工具(大沼 2008)によって施文されているとされるが、施文具の形状や素材などの具体的な説明はなされていない。幣舞式の文様構成要素の中では刺突文が多用され、中空状工具による施文が多くなる。これらの土器を観察すると、刺突幅と沈線幅が対応する場合も多く、沈線を表現する際にも施文具を流用していた可能性が高い。東北地方における大洞式土器の施文具は、先端を鋭利に加工した道具であり、骨角器や木製品が想定される(會田 1991)。聖山式にも同様の施文手法が用いられていると考えられるが、幣舞式土器の施文手法ははまだ明確な叙述が成されていない。

図-8は折衷土器の沈線のレプリカをSEMによって拡大した図である。聖山式に比べ沈線が幅広で浅いが、沈線中央には左右を分断する盛り上がりが見られ、実際には細身の施文具で重ね引きを行っていることが分かる。図-9,10はデジタルマイクロскопによる拡大図で、沈線中央の細かい線状痕と半月状痕を鮮明に観察することが出来る。線状痕の間隔は0.2mm以下で、植物繊維によるものと考えられる。

本章冒頭において指摘したように、幣舞式土器様式に中空状工具が多用されていることから、これらの痕跡が土器全体の沈線文を施文する際に、中空状工具を流用することによって形成された可能性が高いと考えた。したがって、沈線に現れる特徴の顕在化による可視化を目的に、折衷土器の沈線文を分析していく。分析に用いたデジタルマイクロскопは、ハイロックス社製 HRX-01である。

図11,12は多重沈線の正確な沈線幅³と胴部沈線を比較計測した図である。その結果、胴部沈線の沈線幅が2338.36 μ mで、多重沈線の正確な沈線幅は2203.97 μ mであった。比較の結果、沈線幅の差は僅か 0.1mm ほどであり、多重沈線と胴部沈線の正確な沈線幅が対応していることが分かった。

したがって、異なる文様表現を行う際の施文具の流用を予測し、同様の施文方法を用いていると考えられる土器を比較対象として観察を行った。比較対象とした図-13は2024年調査の際に遺構外から出土した土器である。口縁部裏には沈線と交差する形で2条の縄線文が付されており、幣舞式土器様式の意匠が加わっている。沈線は幅広ではないものの、折衷土器と同様に歪みが目立つ。この土器の口縁部下沈線を拡大し観察したところ、一部に折衷土器の胴部沈線と共通する線状痕が確認された。残存するのは一箇所のみで

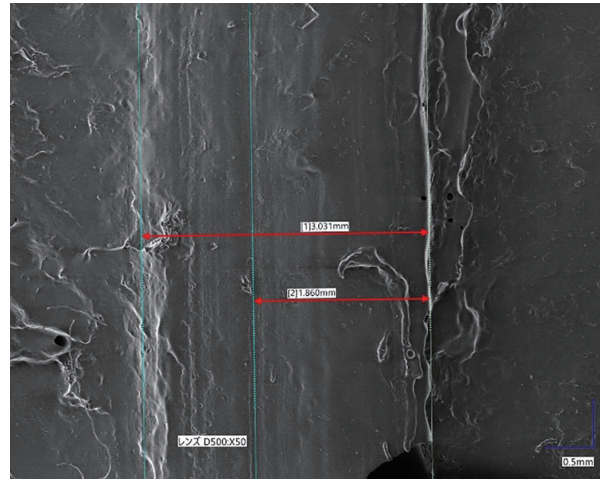


図8 折衷土器胴部沈線のSEM拡大図



図9 半月状痕



図10 線状痕

あり、他の部分は施文後の調整によって整形されているが、かろうじて植物質と思われる繊維痕が認められる。これらの施文痕跡の類同は、折衷土器において、多重沈線と胴部沈線が同一の施文具を流用して施文されていることを意味す



図11 多重沈線拡大図



図12 胴部渦巻沈線 拡大図



図13 調査区出土土器



図14 図13の沈線拡大図

る。すなわち、折衷土器の口縁部に施された多重沈線は、異系統の施文具による模倣であり、施文の際に生まれる線状痕などの特徴的な施文痕跡を整形することによって、聖山式土器の施文に近づけていることがわかる。

一方で、両土器に共通する歪んだ沈線は、幣舞式土器に散見される「沈線を指でなぞる技法」(大沼 2008)によって発生していると考えられる。折衷土器の沈線部には、線状痕及び半月状痕が確認できないことから、多重沈線の施文具による痕跡は擦り消され整形されていることが証明できよう。施文方法は、①幣舞式土器の施文具の重ね引きによる文様の下書き ②指による多重沈線の整形という形で行われたと考えられ、施文具の使い分けは行われていないと判断した。

5. 成果と考察

有珠モシリ遺跡出土の折衷土器は、聖山式土器と共通した口縁部付近の形状を持ちながら、胴部は幣舞式の文様構成であり、施文具も幣舞式に多用される中空状施文具である可能性が高い。また、沈線幅の分析から、胴部沈線と多重沈線の土器文化を異する二つの文様が、同一の施文具を流用して施文されていることも判明した。当の土器は、製作者が文様構成を理解している事実や、中空状施文具を用いること、聖山式の文様を模倣していることから、幣舞式土器文化圏から移住した人物によって噴火湾北岸地域で製作された土器であると考えられる。

製作者の移動であれば、移動先の土器との間に影響関係が見られ(今村 1977,2011)、折衷様式として文様や器形などに特徴が生まれる。つまり、この土器が道央部以東からの移住者による製作であるなら、聖山式の要素を取り入れるこ

となる。本例の場合、胴部上半をその要素として評価することが出来る。このことから、有珠モシリ遺跡を利用した集団の中に、道央部以東に出自を持つ人々が含まれていたことが示唆される。

同様に、土器の組成が極端に異なっている伊達市稀府川遺跡例や、広範囲に幣舞式土器が散見される八雲町・森町の事例においても、その背景に道央部以東に出自を持つ集団の移入が示唆される。道央部以東では美々3式期に道南部からの搬入品が増加し(土肥 2025)、その背景には東北北部からの移住者が増加したことが考えられる(関根 2012)。その結果、津軽海峡を挟んだ両地域に聖山式土器文化圏が誕生し、在地色の強い浜中大曲式土器⁴の系統は幣舞式に受け継がれたと考えられる。すなわち、縄文時代晩期末の北海道における人の移動は、全道規模で起きていたと言える。

6. 結語

本研究では、有珠モシリ遺跡出土の聖山式と幣舞式の折衷土器を中心に据え、当期における土器の移動と土器文化圏の検討を行った。第一に有珠モシリ遺跡の晩期貝層ブロックサンプルの分析・類例の集成を行ったことから、この土器は聖山I式併行であり、幣舞式の古段階に属することが分かった。

また、併行期における道南部の幣舞式出土例を集成し、道南部への搬入品および製作者の移動製作と思われる土器を検討した。聖山・幣舞式期における土器移動の背景には、東北地方からの強い影響と人の移入がもたらした社会変動が根底にある(関根 2012)。その社会情勢の中で、道央部以東に出自を持った人物が少なからず移動し、土器製作に関わっていたことを読み取ることが出来た。

加えて、レプリカ法による施文部のレプリカの抽出・電子顕微鏡による施文部の観察を行い、沈線の差異から導き出される施文具の差異について実証を試みた。その結果、各々の集団が用いる施文具の差異が施文部に明確に現れることを実証することができた。レプリカ法・デジタルマイクロスコープによる分析は細かな製作痕の観察に適しており、目視による観察の限界を超え、線状痕や半月状痕といった異系統の施文具による施文を明らかにすることが可能である。この研究方法は、他文化の文様を模倣する際に施文具が異なっていることや、施文手順の差異・逆転を見極めるための手がかりとなり、沈線がその判断基準となる。異なる施文具



図15 道南部における幣舞式土器出土遺跡

によって、他の土器文化の文様を模倣した類例は実際には多く存在することが予測できる。今後は、型式学的検討を中心に据え、様々な研究方法を取り入れる事によって土器の具体に迫り、詳細な分析を行っていきたいと考えている。

本論では筆者の力量不足から、全道域における検討を行うことが出来なかったが、道南部を主体とした幣舞式土器の分析は新視点であったと考える。しかし、施文手法のさらなる検討や、道央部以東における聖山式の出土例・共伴例など、検討・再検討すべき課題は山積みである。これらを今後の課題として、段階を踏みつつ研究を継続する予定である。

謝辞

本論は東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科に提出した卒業論文に加筆したものである。

本論の執筆にあたり、日頃よりご指導頂いている青野友哉先生、佐藤祐輔先生には多くの教示を賜った。また、澤田恭平氏(釧路市立博物館)、山田央氏(七飯町歴史館)には、資料調査を快諾して頂いただけでなく、有益な助言も多く賜った。末筆ではありますが、心より感謝申し上げます。

註

- (1) 拓本は澤田恭平氏より提供を受けた
- (2) 大沼は対象とした2点を「駒里下層式」(石川・金山 1970)に相当する資料として扱っている。
- (3) 會田容弘が里浜貝塚出土資料の分析にあたり、「残沈線」(會田 1991)と呼称したものと同義である。
- (4) 浜中大曲式土器と聖山式土器に系統関係はなく(福田 2003)、洞爺湖町高砂貝塚を除いて、同一の遺跡で出土した例はほほない。

参考文献

會田容弘 1991 「棒状骨角器考—宮城県里浜貝塚台地地点出土の縄文後・晩期土器の沈線施文と磨きの技術—」『考古学研究』第41巻第3号 pp.39-59. 考古学研究会

青野友哉, 永谷幸人, 三谷智広, 中村賢太郎, パレオ・ラボ AMS年代測定グループ 2023 『北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告3』東北芸術工科大学

青野友哉, 永谷幸人, 三谷智広, 中村賢太郎, パレオ・ラボ AMS年代測定グループ 2024 『北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告4』東北芸術工科大学

青野友哉, 永谷幸人, 三谷智広 2025 『北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告5』東北芸術工科大学

飯島義雄 1989 「体部文様からみた「聖山式土器」」pp.177-220.『考古学論叢』Ⅱ 纂修堂

石川徹・金山哲夫 1970 「縄文文化晩期後半の住居遺跡千歳市駒里遺跡の概要」pp.97-105.『北海道考古学』6

石本省三 1998 「聖山以降の渡島半島」『聖山以降の渡島半島』資料集「聖山以降の渡島半島」実行委員会

今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究」上 pp.1-29.『考古学雑誌』63巻1号 日本考古学会

今村啓爾 2011 『異系統土器の出会い』同成社

丑野毅・田川裕美 1991 「レプリカ法による土器圧痕の観察」pp.13-36.『考古学と自然科学』第24号 日本文化財科学会誌

大島直行 1987 「遺構外の遺物」pp.49-106.『高砂貝塚』札幌医科大学解剖学第二講座

大沼忠春 2008 「幣舞式土器」小林達雄編 pp.700-707.『総覧縄文土器』「総覧縄文土器」刊行委員会

金森典夫 1989 「幣舞式土器様式」pp.325-328.小林・小川編『縄文土器大観』4 小学館

小林圭一 2018 「亀ヶ岡式土器とその年代観」pp.28-35.鈴木克彦編『季刊考古学 別冊25「亀ヶ岡文化」論の再構築』雄山閣

澤田恭平 2018 「北海道の縄文晩期社会の特質-道内地域差と遺構, 遺物の文化-」 pp.55-60.鈴木克彦編『季刊考古学 別冊25「亀ヶ岡文化」論の再構築』雄山閣

柴田直人 2006 「対雁2遺跡出土のV群土器について」pp.219-228『江別市対雁2遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター

斜里町教育委員会 1999 『ボンシュマトカリベツ9遺跡』斜里町教育委員会

鈴木信 2002 「道央部における晩期後葉の土器編年」pp.77-96.『江別市対雁2遺跡(3)』財団法人北海道埋蔵文化財センター

関根達人 2012 「北海道晩期縄文土器編年の再構築」pp.33-52 『北海

道考古学』第48輯 北海道考古学会

芹沢長介編 1979 『峠下聖山遺跡』七飯町教育委員会

鷹野光行 1981 「晩期の土器 東部の土器」pp.207-215.『縄文文化の研究』4 雄山閣

常呂町教育委員会 2000 『常呂川河口遺跡』常呂町教育委員会

豊原熙司 1994 「北海道東部の土器」pp.21-31 『縄文文化の研究』4 雄山閣

土肥研昌 1996 『川端遺跡・川端2遺跡』由仁町教育委員会

土肥研昌 2017 『木古内町大平遺跡』4 北海道埋蔵文化財センター

土肥研昌 2025 「聖山式・タンネトウL式土器の特徴と対比」pp.24-29.『第46回南北海道考古学情報交換会資料集』南北海道考古学情報交換会

中田裕香 1998 「北海道美沢川流域における縄文時代晩期中葉から後葉の土器群について」『北方の考古学』pp.189-198. 野村崇先生還暦記念論文集

野村崇 1985 『北海道縄文終末期の研究』みやま書房

林謙作 1987 「亀ヶ岡と亀ヶ岡もどき-地域性を捉える指標-」『季刊考古学』第21号 pp.45-50. 雄山閣

福田正宏 2000 「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」pp.129-158 『古代 第108巻』早稲田大学考古学会

福田正宏 2003 「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系統」pp.19-52 『海と考古学』5 海交史研究会

福田正宏 2007 『極東ロシアの先史文化と北海道 -紀元前1千年紀の考古学-』北海道出版企画センター

北海道埋蔵文化財センター 1983 『ママチ遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 9

北海道埋蔵文化財センター 1991 『牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川右岸遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書68

北海道埋蔵文化財センター 2005 『上台1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書217

北海道伊達市教育委員会 2003 『図録 有珠モシリ遺跡』北海道伊達市教育委員会

峰山巖編 1983 『南稀府5遺跡』

森町教育委員会 2004 『森川2遺跡』森町教育委員会

森町教育委員会 2006 『鷺ノ木4遺跡』森町教育委員会

八雲町教育委員会 1988 『山越5・6遺跡発掘調査報告書』

山内清男 1933 『日本遠古之文化』先史考古學會

吉崎昌一 1965 「縄文土器の発展と地域性—北海道」pp.30-63. 鎌木義昌編『縄文時代 日本の考古学Ⅱ』河出書房